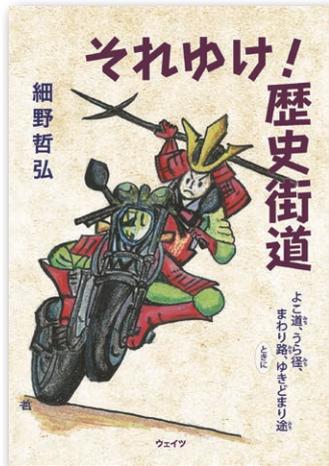


書籍紹介



細野哲弘 著
ISBN:978-4904979327

『それゆけ! 歴史街道』

—よこ道、うら径、まわり路、ときにゆきどまり途—



小林秀雄がかつて、こんなことを書いていた。日本には、一般読書人の中に「歴史好き」という人がたくさんいる。「歴史好き」は、歴史の真実感を求めていて、過去の人々との人間らしい交わりを結びたいと願っている。歴史的教養とは、こうした市井の「歴史好き」が面白いと思う歴史のことである。

本書の著者である細野哲弘氏も、そういう「歴史好き」の一人、しかも筋金入りである。本人は「素人歴史探偵」を自称しているが、いやいや、本書の史料に基づく記述は素人の水準では到底ないもので、正直、舌を巻いた。

小林秀雄が「歴史とは、上手に思い出すことだ」と言ったのは有名であるが、本書は、その言葉の意味を分かせてくれる。細野氏は、本書を書くにあたって、古城、古戦場、古刹あるいは墓所など、現地に赴いている。上手に思い出すためである。本書の中には、戦国大名の妻の口を借りて語るという、まるで歴史小説のようなエッセイがあるが、きっと、上手に思い出せたので、思わずそういうスタイルをとったのであろう。

本書が採り上げるのは、ほとんどが、歴史の教科書や大河ドラマによく登場するような、歴史の表舞台で華々しく活躍した成功者ではない。むしろ、知る人ぞ知る傑物でありながら、一般にはあまり光が当てられてこなかった人物たちである（例外は織田信長だ

が、それは氏の郷土・岐阜の英雄だからであろう）。

特に、幕末に関して氏が採り上げるのは、小栗上野介、林忠崇、酒井玄蕃、岩瀬忠震、水野忠徳など、敗者となった幕府側の人物ばかりである。彼らのように、優れた才覚と傑出した器量を持ちながら、時の運に恵まれなかった悲運の実務家にまなざしを向ける。業績や結果ではなく、人物そのものを見ようとする。それが氏の流儀なのであろう。

察するに、氏もまた、実務家として生きる中で、時代の荒波に翻弄され、人には言えぬ無念をひとり胸の内に秘めて耐えてきたに違いない。だからこそ、幕末の幕府官僚たちの気持ちが分かるのだ。もしかしたら、氏がその胸の内を明かして語らうことができたのは、小栗や林らだけだったのではなかったか。

最後に、氏ならではの斬新な解釈と感じ入った点を特筆しておきたい。それは、織田信長の本能寺における最期の言葉「是非に及ばず」についてである。この台詞は、一般的には、敵が用意周到な明智光秀と知って逃げられぬと観念したことから発せられたものと解されている。しかし、氏の想像力は、そうはとらない。信長が逃げられぬと観念した相手は、明智ではなく、こうとしか生きようがなかった己自身であった。私は、この説が正しいと思う。

紹介者 経済産業省 大臣官房参事官 中野 剛志